

ざいん

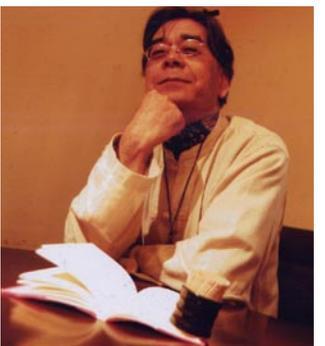
北海道

郷土から広がる

同人たちの闘志



発行人 光城健悦



同人 こしば きこう

●『未明』から『ざいん』へ

文芸誌『ざいん』（一九九七年創刊）は、『未明』（一九八四年創刊）を改題して発足した。共に北海道室蘭市が発行所になっている。編集人は井村敦で地元の印刷所経営者だ。これは強みで、何かと無理が効く。感謝している。

ここで両創刊号から「編集後記」を引く。文芸誌『未明』創刊号に後記はなく、二号になる。「二号ができた。『ニゴウガデキタ』韻が良い。今までは文を書く作業は精神生活にとっても良いものと思っていたが、メ切間近、明け方までかかりの原稿書きは、不健全そのもの。完成が女神の微笑みならメ切は肘鉄砲か」

『未明』から『ざいん』創刊まで一三年あまり。『未明』改題『ざいん』(SEIN)となった。存在する、移り変わる現在という意味のドイツ語である。振り返れば『未明』誌は十号の誌齢を数えた。改題十一号としようとの声もあったが、新同人の加入もあり、心機一転『創刊号』でと決めた。後記は

いずれも井村編集人の文である。

この改題に立ち会った先輩がいる。私達の精神的支柱になっている、芥川賞作家・三浦清宏さんだ。三浦さんは室蘭生まれの東京育ち。『長男の出家』で第九十八回芥川賞を受賞している。古里室蘭に年に一度は帰ってくる。帰られたら私達仲間と酒宴をする。改題の年、例のごとく三浦さんに交えて新しい名前探しをワイワイして、決めた。少々悩んだのは、ドイツ語を使うか、和語なら仮名か平仮名か、だった。結論は「平仮名」の柔らかさにした。いまでも気に入っている。

同人誌の目的は何だろう。井村編集人は「創作が個人の作業とはいえず、同人からの正直な感想は聞き捨てるものばかりではない。熱説してくれていちばんの熟読者は、うなずける。私は（評価されて実力）の持論を続けている。同人の枠のなかだけで、内輪褒めやお山の大将になつては、もうそれまでなのだ。他流試合宜し、

が、堅牢な文捌きは承知しているので、期待がもてる。海野渡は、エッセイも休みがちなので、ここ一発の力を見たいものだ。最後は私、光城健悦になる。小説歴は二十年だが、詩歴はそうとう長い。詩集『人名伝』で小熊秀雄賞候補、北海道詩人協会賞受賞。前北海道詩人協会会長。詩集の他に舞台脚本&構成、『北のシンフォニー』作詩をする。これまで東京・サン

トリールホールや浜離宮朝日ホールで演奏会をさせていた。『文芸思潮』現代詩賞奨励賞連続受賞。室蘭版画の会創立会員。

●壁を越える闘志

本誌は特段の旗印を持っていないが「清新で新しい作品」を求めてきた。これまで休刊はない。この間、富士正晴全国同人雑誌賞で連続二年最終候補になってきた。北海道では当該だけになる。同人は各人、室蘭圏内を越え、全道区に、さらに全国区に挑戦している。

同人の個性は、仲間ですれ違って培われ発見していくのを体感してきた。その事例を二、三上げてみたい。ひとつはリアリティの事だ。十三号のこ

しばきこう『冬の透視図（水槽の女）』は頭のかなかの現実ではない。こしばが北大大学院時代に体験したバイトが下敷きにある。彼の前作『帰郷』はホームレスを素材にしているが、その前年に舞台公演で東京に出かけたとき、新宿でホームレスに三日間同行したそう。事実の下敷きが、いかにリアリティを拡大させたかの事例になる。次に触発がある。浅野清は、三浦清宏論を精力

応募宜しと思ってきた。そして同人各位から文学賞受賞者が出てきた（東北北海道文学賞、海洋文学大賞優秀賞になる）。以降、受賞者は続いている。

●『ざいん』の仲間たち

ここで同人を紹介したい。同人は「同志人」と思っている。年齢順にする。

浅野清は、元公立学校校長で「三浦清宏論」で注目された。宮沢賢治研究者でもある。小説『遙かなる潮路〜樺太逃避行〜』は三七〇枚の長編で、新風舎出版賞フィクション部門奨励賞を受賞した。本年度、評論『月に吠える論』地面の底に白い朔太郎の病気の顔』で第二十五回室蘭文芸賞本賞受賞。評論『三浦論』でコスモス文学新人賞も受賞。おだ多朴は、元市立室蘭図書館長。歴史小説時代小説ではない）に長じている。史実や実録に大胆な仮説を立て虚構の空間を組み立てる、希有な書き手なのだ。室蘭文芸賞佳作受賞。緻密に虚構を編みながら、リアリズムを構築していく。

的に展開してきたが、もうひとつ、金田一京助や知里幸恵に取り組んでいる。アイヌ文化の継承運動に参加を始めた。これは浅野が登別市に住んでいるのに係わる。郷土史実が根っこにある。地場素材ともいえるし、貴重な素材にもなる。本年、知里幸恵の記念館が登別に建てられる。特に近年、アイヌ文学研究が熱を帯びてきた。それと関わり、縄文アニミズムも注目されてきた。北東北から道南地方を一带にした「世界文化遺産」登録が現実味を増してきたのだ。

そして表現の壁がある。こしばのエッセイのなかに「小説の大きな壁にぶつかる。書けば書くほど、『佳作』という条件を備えていない。表現の鮮烈さ、独自性がない。言葉が躍動感を欠いて、表現の新鮮さが持続されないのだ。何よりも表面的巧緻さばかり目立ち、物足りない空疎な作品になる」とある。だれもがぶつかる焦り、自信喪失、そして平板さだろう。『ざいん』の同志たちと（作品で競い合い、評価で讃え合い）たいものと念じている。

例会は「雑談会」だが、密かな闘志がチラチラ見えて、そこが楽しいのである。

（光城健悦）

こしばきこうは、舞台演出家。利賀演出家コンクール二〇〇四年に優秀演出家賞を受け、モスクワ芸術座で演劇研修。実験演劇集団『風蝕異人街』MS企画事務所主宰。東北北海道文学賞（小説）最終候補になる。北海道大学大学院修士課程卒。現在は国学院短期大学で講師をしている。

井村敦は、小説の腕は定評がある。『カンカン虫』や連載していた『請願巡査』などは、地元を題材にして高い評価を得ている。地域文芸を支えていると、平林記念賞を贈られた。室蘭文芸協会や港の文学館の、縁の下を持ち上げている逸材なのだ。峠谷光博は、鋭い存在論を持ち北海道詩界で異彩を放つ。第三十九回現代詩手帳賞受賞。道内初である。筑波大学中退。小説は、浮遊する実在と存在を特異な手法で切り込んでいく。注目の若手になる。

守谷弘は、プロの作曲家兼指揮者だ。東京音楽大学卒で、現在まで日本フィル・東京フィル・都響・東京混声などを指揮する。音楽事務所「ツァイス」代表取締役。大田フィル音楽監督。交響合唱組曲『北のシンフォニー』で壮大な讃歌を仕上げた。全九楽章。エッセイの妙味はなかなかのもののである。

ただひとりの女性同人は、さとうじゅんこになる。小説は北日本文学賞（選者・宮本輝）で三次通過。家族のあり方や軋轢に鋭い視線を投げかける。安定感のある筆致で、題材をすくい上げる。本誌のホームページと会計を担当。パソコンの巧者なのだ。

本庄英雄は、新同人。詩歴は長いが散文は別物で、熟達を待っている。初めての小説は本年にな

ざいん 事務局

〒050-0071
北海道室蘭市水元町二・七 光城方
☎0143-46-1242